



ホテルメインエントランスの右手にレストラン「Le Louis XV - Alain Ducasse」が店を構える

# ル・ルイ・キャーンズ & オテル・エルミタージュ Le Louis XV & Hermitage

世界にはまだまだ日本人が訪れていないホテルがある。このコーナーではホテルエが知っておくべき「世界のリーディングホテル」を紹介する。本連載では、著者自身が長年にわたる個人旅行中に自分の目で感じ取り、コメントを書き込み、自分のカメラで思いのままを撮ってきた写真を掲載する。今回は前回(4月13日号)紹介したオテル・ド・パリの後編として、レストラン「ル・ルイ・キャーンズ」「Le Louis XV」と姉妹ホテル「エルミタージュ」「Hermitage」を紹介する。

※本連載は毎月2・4週号掲載



グランドロビーに立つルイ14世の騎馬像前に、「ル・ルイ・キャーンズ」「Le Louis XV」のゴージャスなエントランスがある



アミューズの次に出てくる野菜のカクテル。ゴールドのアンダープレートが映える優雅なセッティングである



筆者 小原康裕

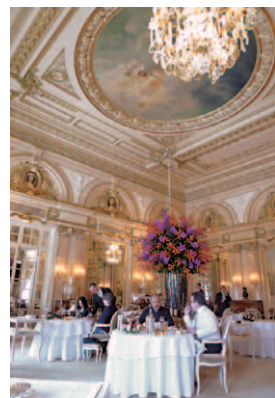
ホテルジャーナリスト。慶応義塾大学法学部法律学科卒。74年Munich Re入社。85年築地原健株代表取締役。2001年投資顧問会社原健設立、代表取締役CEO。JHRCA、日本ホテルレストランコンサルタント協会理事。  
※現在、著者のホームページで「世界のリーディングホテル」を連載中。多くの美しい写真と興味深いコメントで、世界中のホテルとそれら関連都市を紹介。  
[www.jhrca.com/worldhotel](http://www.jhrca.com/worldhotel)



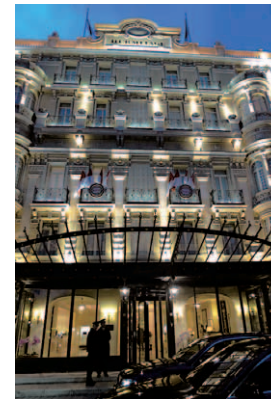
レストラン「ル・ルイ・キャーンズ」「Le Louis XV」のゴージャスな店内。若き日のアラン・デュカスがオーナーであるSBMとの契約で、実に就任から3年弱で3ツ星を獲得した伝説的レストランだ



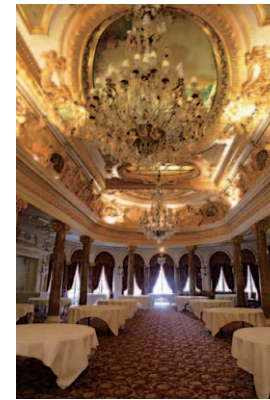
窓側奥のコーナー席を用意して頂いた。冬の昼下がり、優雅なデジュネのひと時



絢爛豪華な天井の壁画とシャンデリア。壁面の意匠を凝らした装飾に目を奪われる



ライトアップされた美しい夕暮れ時の「Hermitage」の正面ファサード。まさに「隠れ家」の雰囲気が漂う



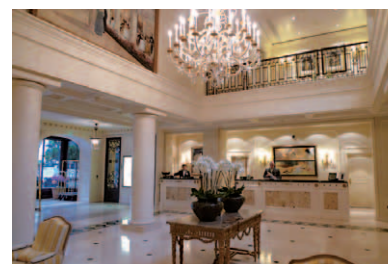
エルミタージュを代表する豪華な「サロン・ベルエポック」「Salle Belle Epoque」



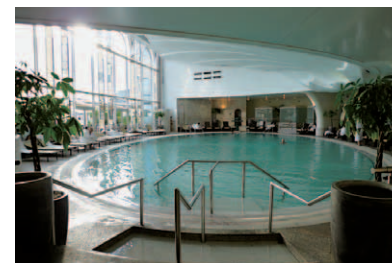
パリのエッフェル塔の建築家で知られるギュスターヴ・エッフェルによって設計されたロビー「冬の庭園」「Jardin d'Hiver」。丸天井に施されたステンドグラスの装飾は圧巻で、国の重要文化財に指定されている



旧館のエlegantな正面ファサード



本館側メインエントランスから続く、吹き抜けの美しいロビーのレセプションデスク



SBMグループが誇る「レ・テルム・マラン」「Les Thermes Marins de Monte-Carlo」のスイミングプール



中2階回廊から俯瞰した優雅なグランドロビー。オテル・ド・パリの男性的ロビーに対してフェミニンの優雅な雰囲気が漂う

モンテカルロのオテル・ド・パリ、それはコートダジュールの眩しい太陽に輝く宝石だ。その魅力の1つに「ル・ルイ・キャーンズ」「Le Louis XV」があるのは間違いなくであろう。4年以内に3ツ星を獲得するという契約で、この壮麗な館の総料理長という重責に挑んだ勇気あるシェフ、それは他ならぬ若き日のアラン・デュカスである。当時、オテル・ジュアナの「La Terrasse」で2ツ星を得ていた彼は、幼いころから料理に並々ならぬ関心を持ち、一流のシェフたちから多くのアイデアを学び独自のスタイルを築いていた。とりわけ師と仰ぐアラン・シャペルに、素材に厳格かつ忠実であることを教え込まれた。

オーナーに当たるSBM「ラ・ソシエテ・ド・バン・ド・メール」「La Societe des Bains de Mer」の選択は間違いなかった。デュカスはまさに偉大なシェフの器だった。1990年3月、弱冠33歳で彼は約束の3ツ星を、実に就任から3年弱で手に入れてしまう。その後のデュカスは「Le Louis XV」を足場に世界のアラン・デュカスとして、日本はもちろん世界各国でその才能を認められ、大成功を収めたのはご承知の通りである。現在のシェフは1996年より厨房を任されたフランク・チェルッティで、デュカスの許で修業を積み独自の世界観を持つ料理で、モナコという国際都市に集うゲストの舌を喜ばせている。

「ベル・エポックの宝石」と称され地中海を見渡すオテル・エルミタージュは、ベル・エポック時代を象徴するエレガントな雰囲気を醸し出す優雅なホテルだ。「Hermitage」は「隠れ家」という意味を持ち、どこかサントペテルブルグのエルミタージュ美術館を思い起こす壮麗な施設を持つ。その1つは「冬の庭園」「Jardin d'Hiver」で、パリのエッフェル塔の建築家で知られるギュスターヴ・エッフェルによって設計されたドーム状のロビーである。やわらかな日差しが差し込むステンドグラスの丸天井は優雅さを極め、国の重要文化財に指定されている。もう1つは「Salle Belle Epoque」で、ベル・エポックを象徴する絢爛かつ荘厳なボールルームに目を奪われる。

エルミタージュは1895年の創業で、スイート50を含めて全280室のゲストルームを有し、3つのレストラン・バーがある。とくにメインダイニングの「Le Vistamar」はグレース王妃が愛したことで知られるレストランで、2011年にミシュラン1ツ星を獲得している。オテル・ド・パリとは姉妹ホテルの関係で、前者が男性的な力強さが感じ取れるのに対し、エルミタージュはどちらかというとフェミニンな雰囲気漂う上品あるホテルだ。SBM宿泊ゲストには「サークル」というカードが渡される。これはルームキーであると同時に付属施設のカジノやテルム・マランなど無料で利用できるカードで、以前発行されていた「カルト・ドール」に替わるものだ。

筆者が訪問した2011年11月は、同年7月に開催されたアルベール2世大公の結婚式の余韻がまだモナコの街に残っていた。いたる所に赤白のモナコ国旗がはためき、ショーウィンドウには大公夫妻の写真が大きく飾られている。世界中の観光客を惹きつけるモナコの魅力は永遠に尽きないようだ。